

# 中国華北の祖先崇拜

——北京平谷県の意識調査を中心に——

周 潔

## 1 問題提起及び研究方法

中国の祖先崇拜について、これまでフリードマン (M・Freedman)、内田智雄、福武直、瀬川昌久などによる多くの先行研究が行われてきた。これらの中国の祖先崇拜(祭祀)研究は「宗族」と結びついて論じることが多く、特に多くの学者は宗族組織の多い南方の祖先崇拜が顕著であることをしばしば指摘するところである (M・フリードマン, 1968)。それと一方、中国北方の宗族組織が規模や組織機能において南方のと比較することが困難であるため、北方の祖先崇拜の実態は多くの研究者の目を逃がしている。筆者は本研究を通じて、意識調査による北方の祖先崇拜の意識を明らかにし、その変容・不変の地理的、社会的背景を分析し、実証データを蓄積するのを目的にする。これは今後の南方祖先崇拜の意識との比較可能性を試み、また、筆者の日本祖先崇拜との比較研究に用いられたいと考えている。

平谷県を調査地にしたのは、一つに平谷県は地理的に華北地区に属しており、地域把握に都合のいい場所である。もう一つには北京から車で2時間半ぐらいの距離にあり、調査に便利であることも挙げられる。平谷県は北京の十県の一つで、伝統的に果物栽培を主にしている農・山村が多いところである。北京市内から70キロ離れている。密雲県、順義県と隣接している。歴史的に戦国時代の燕国の漁陽郡としてその繁栄を見せ、その後、元の時代に、漁陽県と改名し、さらに明の洪武はじめ頃、漁陽県を平谷県と改名、行政的に薊州の下に置いた。清乾隆8年から、平谷県は順天府の下に置いた。1949年に新中国が成立してから、北京市の行政区画の一つの県になってずっと今日に至っている。県の下に21個郷、鎮があり、そのうち、5つの鎮と16の郷がある。(平谷県誌編纂委員会、1988)

本調査は1997～1998年に行われたもので、調査方法は主に調査票によるものである。筆者は数回、調査地にお邪魔し、同県の県責任者及び調査対象地の責任者らと事前会議を開き、調査の目的や注意事項などを説明した。調査票の配布は同県政府の役人らのご協力を得て、三つの郷、鎮に一つの代表村<sup>1)</sup>を選択し、それぞれ131部、160部、152部の調査票を配布した。

華山鎮は大里村に集中し、村の131世帯のうち、124部を回収し、94.6%の回収率である。回答者の平均年齢は40.2歳である。そのうち、男性が39.8歳(76人)で、女性が41.6歳(48人)という割合である。峪口鎮は胡営村に集中し、村の160世帯のうち、138部を回収し、86.2%の回収率である。回答者の平均年齢は40.6歳である。そのうち、男性が41.9歳(103人)で、女性が36.9歳(35人)という割合になっている。大興庄郷は北捻頭村に集中し、村の152世帯のうち、143部を回収し、94%の回収率である。回答者の平均年齢は41.25歳である。そのうち、男性が41.3歳(75人)で、女性が41.2歳(68人)という割合である。

調査項目は、祖先崇拜の意識調査と伝統的家意識の調査に分けられている。あわせて17問がある。調査票の内容は筆者の日本宮崎県下の三つの村で実施した内容とはほぼ一致している<sup>2)</sup>。事前に郷、鎮の責任者に世帯主の方が望ましいと念を入れたため、3地点の回

表1 回答者の職業の一覧表

職業 \ 村	華山鎮大里村	峪口鎮胡営村	大興庄郷北捻頭村
農 業	108 (87.1%)	92 (66.7%)	120 (83.9%)
商 業	6 (4.8%)	3 (2.2%)	6 (4.2%)
会社員	8 (6.5%)	39 (28.3%)	11 (7.7%)
無回答	2 (1.6%)	4 (2.8%)	6 (4.2%)

注：上記表における数字の単位が人、%が各村の回答者を参照基数に計算したもので、以下同

表2 回答者の学歴一覧表

村 学歴	華山鎮 大里村	峪口鎮 胡宮村	大興庄郷 北捻頭村
小学校以下	8 (6.5%)	4 (2.9%)	15 (11.0%)
小学校卒	18 (14.5%)	33 (23.9%)	19 (13.0%)
中学卒	52 (42.0%)	39 (28.3%)	62 (43.3%)
高校卒	35 (28.2%)	20 (14.5%)	36 (25.1%)
専門学校	5 (4.0%)	25 (18.1%)	1 (0.6%)
大専 <sup>3</sup>	1 (0.8%)	12 (8.7%)	2 (1.4%)
大学	1 (0.8%)	3 (2.2%)	—
無し	1 (0.8%)	2 (1.4%)	8 (5.6%)
無回答	3 (2.4%)	—	—

答者の性別は大興庄郷北捻頭村がほぼ男女同数のほか、華山鎮被調査者の76人(村回答者全体の61.2%)と峪口鎮の被調査者138人(村回答者全体の75%)が男性になっている。回答者に性別、年齢、学歴、家での地位(世帯主か、世帯主の妻か、長男か、次男かなど)職業などに答えを求めた。以下に回答者の職業一覧表と回答者の学歴一覧表を付する。

## 2 宗教的な祖先崇拜に関する意識調査

靈魂不滅説はかつての中国で、仏教側が儒教側の靈魂消滅説に対して反論したものである。仏教の中での六道論回——三世兩重因果という人間存在の根本矛盾に対する深刻な洞察と合理的な解釈は(竹田, 1957: 217)中国だけでなく、日本まで深い影響を与えている。中国民間信仰において、靈魂は死霊からやがて祖霊へ昇華融合していくのである。それは死後における靈魂不滅が前提となっている。この固有信仰と仏教との結合によって、この不滅の霊が業をもって、永劫輪回の旅を続けるという解釈は可能になるのである。即ち、靈魂が輪回の主体として考えられてくるのは、きわめて自然になるのである。したがって、靈魂残留説は祖先崇拜を進める上で、一つの便法ともなっていたのである。

したがって、今度の調査では、靈魂をめぐる問題を7問出した。他の3問は宗教上の問題や墓事情をめぐる質問になっている。現代中国北方地区において、祖先崇拜という信仰がどれだけ残っているのか、本調査地の祖先崇拜信仰意識は地理的背景や社会的背景などにどのように関わっているのか、今度の意識調査のデータを通じて明らかにしたい。(具体的な質問は付1を参照せよ)

まず、付1の第1表から見ると、三つの村で、靈魂残留説を信じる人がそれぞれ、大里村の37人、胡宮村の14人、北捻頭村の35人と少なく、逆に信じないのはそれぞれ67人、103人、93人になっていて、圧倒的に多いのである。前に述べたように靈魂残留説は祖先崇拜の前提になるので、この残留説の動揺が祖先崇拜の衰退をある程度意味しているのではないかと思われる。さらに第2表から、靈魂残留説を否定するのをもっとはつきり伺えるのである。靈魂を否定するから、あの世で親と会うわけにはいかないであろう。また、祖先の靈魂は普段、墓とあの世にあると答える人は大里村、胡宮村、北捻頭村にそれぞれ118人、133人、133人になっていて、大陸文化の深いことが伺える。

第4表は伝統的な盆行事についての質問である。陰暦の7月15日に行なわれる盆行事は後人の祖先に対する態度が端的に示されたもので、祖先崇拜の重要な課題の一つでもある。盆行事について、民間ではこういう説が残っている。遠く二千五百数十年の昔、釈迦仏在世の時から、陰暦7月8日に行われる施餓鬼会とは同意累連の関係にある。釈尊の愛弟子日蓮尊者が神通力により、母が死後餓鬼道に落ち、苦しんでいることを知り、それを救いたいと釈迦に願い出、その教えによって、旧7月15日が仏弟子達の「修行」の終わりの日になるので、自ら供養主になって、誠心誠意母の行事を営んだ。そのため、母の魂は恐ろしい餓鬼道から逃げられたとともに、そのほかの衆生も、その功德に恵まれ、苦しみから救われた。日蓮尊者がこの喜びを衆僧達と分かち合うため、自分の身につけていた衣を衆僧の数で切って、これを配られた。これは以後の「布施」という語になる。こうした盆行事は六世紀末まで中国で広く普及され、最も重要な仏教祭儀となっていたのである。というのは、僧侶に供え物をすれば自らの父母や祖先の靈魂の救済と安息を確保することができるという点で中国人を魅了してしまうからであって、昔から民間的に盆行事が盛んに行われたのである。盆祭には靈を迎える儀式、靈を供養する儀式、靈を送り出す儀式などを含まれている。誰が主役になるのかについて、日本では二通りの解釈がある。盆祭に祖霊を主役として、無縁仏が後に追加されたものだという柳田國男の論点に対して、お盆の主体は餓鬼に食物を供えて、不幸や疫病を回避しようとする儀式であって、祖霊を礼拝するものはもはや後から追加されたものであると鈴木氏の主張もある(鈴木, 1979)。

これらの議論がともかくとして、附1の第4表から

わかるように、調査地の三つの村では、「帰ってくることは不可能」ときっぱり答えた人は55人、85人、97人に、「知らない」と答えた人は27人、33人、23人になっているので、盆行事が各村で殆ど行われていないのは事実であるらしい。これは第10表の「宗教がない」という村人の態度（それぞれ91人、104人、123人である）と直接関わっているのではないかと思われる。

それにも関わらず、祖先（三つの村でいえば父母や祖父母などの近い祖先）に対する態度が清明節の行事に現れ、清明節に墓参りに行く際、墓に供え物を捧げたり、祖先に対して、現世の幸せを与えてくれるよう願ったりすることもある。ここでの祖先は遠い、家を開いた祖先よりも、むしろ近い祖先（父母、祖父母）への愛着感が深く、中国人の現世主義が伺える。

### 3 伝統的「家」意識の調査

中国の家族制度は中国祖先崇拜を発生する基本的な底であり、祖先崇拜の研究に大変重要な問題の一つといえる。

家族は時代と民族を超えて、社会生活の最終末端単位として、極一般的に存在するものという（竹田、1957：14）のに対して、家とは、家産、家業に立脚して、系譜の世代的連続を重視する家族団体のことである（森岡、1984：3）。したがって、家族と違って、家は家族生活とは独立に世代を超えて存続していくのである。その存続は直系相続によるのが原則である。また、血縁の断絶はそのまま家の断絶を意味してはなく夫婦養子の風習をみてもわかるように、血縁が切っても非血縁者の養取によって、家の存続（祭祀相続と家産相続を含まれている）は行われることができる。要するにすべての家は持続への要求は持っているといえる。これは家の始源に関わり、家の祖先が重大な関心と深い尊敬の対象になることに基づいて、成り立っている。祖先祭祀の主宰者という職務を長男に与えているため、相続が男系のみに限られていた。男子孫の絶えることは「無後」「絶嗣」などといわれ、最も忌むところとされていた。しかし、このような伝統的な観念は新中国成立後、中国の憲法による男女平等の理念やイデオロギー上の様々試練をうけることになった。このような「家」意識が現代農村でどれだけ、残っているのかまたは変わったかは筆者の調査目的である。家に関する代表的な質問として7問を出した。（具体的な質問は附2を参照せよ）

かつて、伝承生活を重要視する中国社会においては、祖先伝来の生活様式を精通した年配の方が尊重されると同時に兄弟間でも年齢の差による長幼の序が厳然として存在していた。長男が他の弟達よりも優越する地位と権限とが与えられている。また、かつての中国家産相続は父祖が死亡しても、その家産の一体性を害されず、父を除いた兄弟の同居生活が続いており、即ち、「一個人の家産の主体」が「数人の共同の家産の主体」へと移行することになるのであるが、（前田、1965：128）附2第1表から示されたように、長男が「家」を相続するのは、それぞれ、30世帯、21世帯、102世帯で、長男と次男によって、行われるのはそれぞれ61世帯、46世帯、24世帯になっている。長男相続、或いは、長男と次男がともに家産相続をするという伝統はいまだに持続している。

しかしながら、長男の優越性が保たれた一方に長男の相続に「将来、反対があるかもしれない」と答えた世帯はそれぞれ66、40、56という高い割合を占めている。また、婿養子をもたらすには「そうする必要がない」と答えた世帯はそれぞれ50、87、97になっていて、伝統的な「家」の権威性が失われ、「家」意識が次第に薄らいでいくといっても過言ではない。これは第4表の「生活の中で一番頼りになるのは夫婦」という回答からもっとはっきりとわかる。かつて親子を主な関係として維持してきた家族が夫婦中心に変わりつつあることは家の変貌の一面が見られているといってもいいと思われる。上記の三つの村が殆ど平谷県政府に近い農、山村に位置されるため、都市化になる傾向がある一方に、政府による「一人っ子」政策の実施などが核家族化に拍車をかけている一因でもあると考えられる。三つの村から何うように農村家族では、夫婦関係に中軸があり、家の系譜の世代的連続性という観念が崩壊しつつある。それと一方、親子=夫婦の同居による直系家族形態が増えるという傾向がある。しかし、今日の直系家族は家制度における直系家族と異なり、単一の家族をなすというよりは親の核家族と子の核家族の世代的結合である。そのため、「老後生活を心配しますか」という問いに対して、「子供が面倒を見ているから安心」と答えたのはそれぞれ62世帯、89世帯、123世帯と「心配しない」と答えたのはそれぞれ44世帯、77世帯、16世帯になっていて、子の核家族は倫理的に親の核家族に責任をもっていることを義務付けられているようである。したがって、「結婚は家のため」と答えた人は98、116、124と圧倒的に多いのである。屋敷の護持は「家」の永続性を保障する上

で墓地とともに「家産」の不可分による全面継承が欠かせないものである。三つの村で調査したところ、祖先から「家産」を受け継いだ世帯がそれぞれ87世帯、121世帯、119世帯になっている。

#### 4 まとめにかえて

以上は、平谷県の三つの村で行われた意識調査であるが、それでは、本調査地の祖先崇拜信仰意識や「家」意識は地理的背景や社会的背景などにどのように関わっているのか、次のようにまとめたい。

まず、平谷県は農・山業に属するにもかかわらず、北京と地理的に近いこと、伝統的、封鎖的な村落生活が次第に現代意識・都会意識によって薄らぎ始められ、伝統的な信仰が崩れつつあるといえるのであろう。殊に、改革開放政策をとってから、以前と比べられないほどの変化を起こした。都市文化をラジオ、テレビ、マスコミなどによって吸収し、道路の舗装などが村まで延長し、都市に出かけるのが一層便利になってきた。村の若者はもちろん、年配の方もよく外に出かけ、視野を広め、村は外来文化の導入によって、保守的な一集団から次第に外向きになってしまっている。調査した三つの村の世帯主の職業を見ると、農業・林業などに専門的に従事する世帯主はそれぞれ回答者の87.1% (大里村)、66.7% (胡宮村)、83.9% (北捻頭村) を占めているにもかかわらず、商業、会社員、他の自営業などに従事する人の比率も高いといえる。つまり、三つの村は程度の差があるが、純農業、或いは純林業の村と言えなくなるのである。

次に、村人の信仰や「家」意識にイデオロギー上の要素を考えなければならない。北京に近いという地理的な利便さがあるばかりではなく、意識の面においても北京に左右される要素が大きいではないかと思われる。1949年以後、中国大陸では、数々の政治試練を経験した。大きい「運動」として、50年代の土地改革、大躍進、60年代の文化大革命などが挙げられる。民間信仰や宗教信仰は「封建的」なものとして、一掃された。このような歴史的な経緯は権力中心地に位置する村人の信仰に多大な影響を与えたのであろう。特に被調査者の年齢層に注目する必要がある。回答者の平均年齢は40.68歳 (大里村40.2歳、胡宮村40.6歳、北捻頭村41.25歳) の若さである。被調査者は殆ど新中国以後の生まれで、信仰上においては「迷信」を打破し、無宗教になろうといういわゆる「唯物主義」の教育を受けてきた。したがって、被調査者の

大多数 (91, 104, 123) は「宗教がない」と答え、仏教を信じるのが10, 28, 15で、儒教を信じるのが17, 3, 1という小人数で、道教を信じるのが最も少ない6人しかなかった。開放政策を進める中、旧来の習慣や信仰などを復活する機会があるが平谷県の例から見れば、これはきわめて可能性の低いものである。

第三に、教育水準の上達は村の伝統的意識の希薄に影響を与えていると考えられる。伝統社会の中で、家族のみが唯一の教育機関となり、農業に関する技術が全部父親や兄達から教え込まれたのであるが、現代社会では一人前の社会人となるための必要な知識は家族以外の、特に小、中学校まで卒業する人は回答者全体の75.8%を占めており、更に回答者の15人は短期大学まで卒業し、4人は大学までの学歴を持っている。学校を媒介として、毎日通学する学生ばかりではなく、村民の間の接触交渉も行われていて、単一的・同質的な考えは多様化になりつつある。他方、教育を多く受けた人は伝統的な祖先崇拜や「家」意識に疑問を多く持つことに挙げられ、教育年数が長くなればなるほど伝統意識が薄らいでいくのである。つまり、教育は村落構造を根底から改変しようとする開放性を促進する重要な要因の一つではないかと思われる。

また、指摘しなければならないのは、男女平等という原則に立つ夫婦本位の一家族を理念していることや「一人っ子」政策を実行するために、近代的小家族が増えてくることである。中国憲法では、男女の同権を規定し、妻の法律上の立場も全く平等にし、更に本論文にとって重要なことは、女性も男性と均等の機会を与え、法律上の財産権が認められたということである。もし、このような「家産」の分割が嫁入りした娘達によって一般的に行われるようになれば、個々の家族成員を超えて、「家」を存続する独特の精神や財物は乏しくなり、「家」の超個人性、実在性が薄れていくことは明らかである。

以上は家意識や祖先崇拜意識が地理的、社会的要素とかがわっていることを簡単に論述した。しかし、家族制度や祖先崇拜なる信仰が衰微しているとはいえ、前の意識調査からもわかるように、清明節などに大多数の人が墓参りに行くし、結婚など「家」のためと答えた人がかなり多いということは単に、国家権力のみでそれを説明することは困難であって、そこには村落民の特有な態度が存在しているし、さらに中国の儒教思想などの問題にも関わっていると思われるのである。これらはいずれも祖先崇拜の衰退を食い止める原因になるのであろう。

以上は三つの村で行われた調査データによってまとめられたものである。これらの調査データは他の地域にどれだけの有効性があるのかについては、丹念な比較作業が必要であろう。これは今後の課題に譲りたいと思っている。

注

- 1) 行政的に郷、鎮の下に行政村がある。行政村（村民委員会）にはいくつかの自然村が含まれている場合がある。調査地の大里村、胡営村、北捻頭村は行政村に当たっている。
- 2) 1989年に筆者は宮崎県で意識調査したことがある。仏壇の内容を除いて、内容的に一致したのは将来的に中国と日本との比較に用いたいという考えがあるからである。
- 3) 三年間の大学教育である。日本の短期大学に当たる。
- 4) 靈魂残留説や仏教上のお盆など「迷信」と見なされ、批判された。
- 5) たとえば、中国南部の宗族復活などが挙げられる。

引用・参考文献

- (1) M・フリードマン、田村克己・瀬川昌久訳、1987、『中国の宗族と社会』、弘文堂。
- (2) 平谷県誌編纂委員会編纂、1988、『平谷県誌』、平谷県誌編纂委員会。
- (3) 内田智雄、1953、『華北農村家族における祖先祭祀の意義』、京都・同志社法学会
- (4) 福武直、S 26、『中国農村社会の構造』、有斐閣。
- (5) 瀬川昌久、1991、『中国人の村落と宗族—香港新界農村の社会人類学的研究』、弘文堂。  
———、1996、『族譜—華南漢族の宗族・風水・移住』、風響社。
- (6) 竹田聴州、1957、『祖先崇拜』、平楽寺書店。
- (7) 鈴木満男、1979、『盆に来る霊』、『葬送墓制研究集成第三巻先祖供養』、名著出版社。
- (8) 森岡清美、1984、『家の変貌と先祖の祭り』、基督教団出版局。
- (9) 前田卓、1965、『祖先崇拜の研究』、青山書院。
- (10) 桜井徳太郎、1977、『靈魂観の系譜—歴史民俗学視点』、築摩書店。

附1 宗教的な祖先崇拜に関する意識調査

(1) 人が死ねば、靈魂が残ると思いますか。

回答 村	残る	残らない	わからない	そのほか
大里村	37	67	20	—
胡営村	14	103	21	—
北捻頭村	35	93	13	1

注：村の所属する鎮、郷を省略する。単位：人。以下同

(2) 人が死ねば、あの世で父母に会えると思いますか。

回答 村	そうと思う	知らない	そうと思わない	そのほか
大里村	20	44	59	1
胡営村	7	41	87	1
北捻頭村	23	53	65	1

(3) 祖先の靈魂は普段どこにあると思いますか。

回答 村	山の上	海	墓	あの世
大里村	1	—	35	83
胡営村	3	1	65	68
北捻頭村	4	2	53	80

(4) 陰暦の七月十五日、祖先の靈魂が帰ると思いますか。

回答 村	帰ってくる	帰ってくることは不可能	知らない
大里村	41	55	27
胡営村	20	85	33
北捻頭村	20	97	23

(5) 祖先は子孫の幸福と家の繁栄を祈っていると思いますか。

回答 村	そうと思う	そうと思わない	知らない	その他
大里村	41	52	11	—
胡営村	9	99	28	1
北捻頭村	28	89	25	—

(6) 祖先の名前が知っているのか。

回答 村	父母	祖父母	曾祖父母	高祖父母	5代以前の祖先
大里村	28	67	10	12	5
胡営村	13	62	37	16	9
北捻頭村	53	53	18	11	8

(7) 祖先は次のどれを指していると思いますか。

回答	大里村	胡営村	北捻頭村
家の始祖	36	40	69
始祖以来の死者	19	52	18
始祖以来家を継ぐ男性死者	4	5	6
自分の祖父母	49	9	12
家に貢献した人	5	6	10
知らない	10	—	22

(9) お墓があればいつ墓参りに行きますか。

回答	清明節	7月15日	祖先の忌日	その他
大里村	119	1	2	—
胡営村	132	—	—	2
北捻頭村	129	2	9	2

(8) お宅ではお墓があるのか。

回答	ある	ない
大里村	99	28
胡営村	120	17
北捻頭村	120	22

(10) あなたは宗教を信じますか。

回答	仏教	儒教	道教	宗教がない
大里村	10	17	4	91
胡営村	28	3	—	104
北捻頭村	15	1	2	123

## 附2 伝統的「家」意識に関する調査

(1) お宅では誰が家を継ぐのですか。

回答	長男	次男	婿養子	その他	長男と次男
大里村	30	10	2	16	61
胡営村	21	2	2	66	46
北捻頭村	102	7	3	7	24

(2) もし、長男が家を継ぐとしたら、次男などの兄弟は異議を申し立てますか。

回答	全くない	将来、 反対があるかも	その他	知らない
大里村	34	66	16	6
胡営村	19	40	46	31
北捻頭村	69	56	2	15

(3) もしお宅では、娘ばかりである場合、必ず婿養子を取りますか。

回答	そうする	そうする必要はない	知らない	その他
大里村	59	50	13	1
胡営村	19	87	16	15
北捻頭村	26	97	10	5

(4) あなたの生活の中で、誰が一番頼りになりますか。

回答	親子	夫婦	兄弟姉妹	親戚	自分自身	仕事	金	無答
大里村	15	52	1	—	28	1	25	2
胡営村	24	34	1	—	52	4	17	6
北捻頭村	34	45	12	1	29	14	7	1

(5) 老後生活を心配していますか。

回答 村	子供が面倒を 見ているから安心	心配しない	不安	老人ホームに いくつもり
大里村	62	44	10	5
胡营村	39	77	12	10
北捻頭村	123	16	2	—

(6) 結婚は家のためですか、自分のためですか。

回答 村	どちらかといえは家のため	どちらかといえは自分のため	その他
大里村	98	17	8
胡营村	116	12	9
北捻頭村	124	19	—

(7) お宅は祖先から受け継いだものですか。

回答 村	受け継いだもの	受け継いだものではない
大里村	87	37
胡营村	121	17
北捻頭村	119	24